

デューラーの「絵画論」(8)

女性の頭部および男性の手と足の草稿の試訳

美術学科

下村耕史

Dürer's Drafts of his "On Painting" (8)

a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前7回の報告(第20, 22~27巻)と同じく,
Dürer Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von
 Hans Rupprich, Zweiter Band, Berlin 1966を底本
 として試みられたデューラー未完の「絵画論」の
 草稿の試訳である。凡例は前回に倣う。

3. 女性の頭部

(承前) Nr. 1 普通の大きさの女性頭部の側面・
 正面観の作成。(ロンドン草稿, 1507年頃, R.2.300~303頁)

頭部正面の幅は $1/11$ である。

頭頂部から顎下の端まで $1/8$ である。顎下の端
 から髪際の額の上端まで $1/10$ である。同じ線上に
 後頭部のつむじがくる。

髪際から顎の下端まで $1/11$ である。

その $1/11$ は3等分される。

その最上部は額である。

次の部分は鼻と眼である。

最下の第三部分は口と顎である。

眉毛と鼻の下端の間の線を二等分する。

その上の部分を三等分する。それに眼球と眼の
 高さが含まれる。

さらにその三部分をそれぞれ一線で分けると,
 6部分が作られる。

その最上部は眉毛と眼の間の隙間になる。

第二の部分は眼の厚さである。その隅は眼球の
 中央を通る線までさがる。

第五の部分に下の眼が含まれる。その隅は上の
 眼まであがる。

鼻の下半分は点で五等分される。下の二部分に
 は鼻翼の高さが含まれる。

鼻と顎の下端の間の線を二等分する。下は顎に
 なる。

上の部分を二等分する。その線は口の中央を通
 る。

口の上の部分を三等分する。下の $1/3$ は唇の厚
 さになる。

顎と口の中央との間を二等分する。上の部分は
 口の下唇の厚さになる。顎と下唇の間には口下の

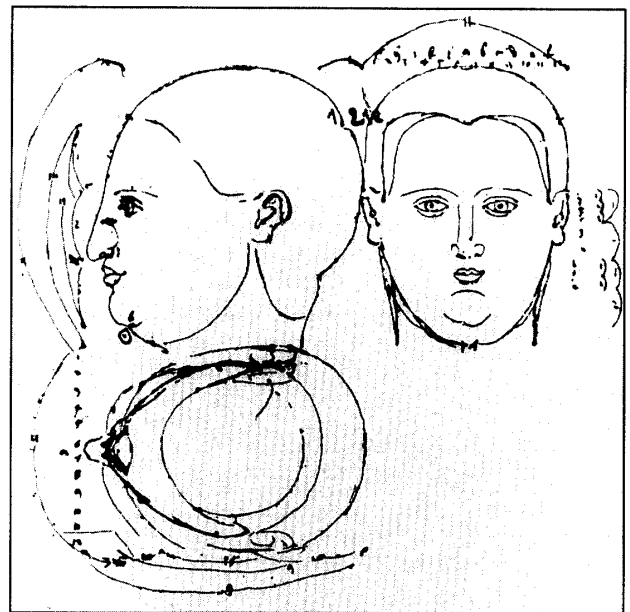


図1 ロンドン草稿 5231, fol. 6r.

くぼみがくる。このようにして顔の部分が大体描かれる。

次に我々は前の鼻から後ろまでの、顔の奥行きを区切る。

頭部をさらに垂線で分ける。それらの線は最後部から最前部まで前に引かれた水平線と交差する。

〔後頭部から、身長 l の〕 $1/9$ の距離にある垂線は鼻の後端と目頭に接する。前から $1/10$ のさらに $1/3$ 後ろの垂線から、頸部は始まり、その線は眉毛の後端に接する。頸部の厚さは $1/16$ である。

〔頭部〕の前から後ろに向かって、〔身長 l の〕 $1/8$ の〔高さの〕方形の $1/7$ の処にある垂線上に顔の旋毛がくる。眼球の頂点と口の后端は同じ垂線上にある。

眼球〔の前端〕に接する垂線と、頸部と眉毛の後端に接する別の垂線の間を一線で二等分する。その線は眼の後ろの隅に接する。

その線の $1/20$ 後ろで頬は終わり、耳が始まる。その線は上の方で眉毛の後端に接し、隣の垂線は下で鼻に接する。耳朶は耳幅の半分である。〔この項やや不明〕

耳の幅は $1/8 \times 1/7$ のそれらの垂線間の幅である。

〔頭部側面の〕後頭部から〔 $1/8$ の頭部の〕 $1/7$ の処にある垂線は、頭部が頸部になる前の、頭部のくぼみに接する。〔頭部側面の〕最後部の線といま述べた線との中央に一線を引くと、その線は後頭部のつむじの位置を示す。こうして顔の側面像の殆どの線が引かれた。

さらに額の旋毛の位置を a 、下の顎の始まる線を b とする。こうして……

次に顔の形態の線を以下のように描く。

0 のある上の方形〔前の文が途切れているため分かり難いが、顔の側面の方形を指す〕内で、耳の前に接する垂線上で頭部は中央の頭頂部になり、そこから頭部は額の旋毛まで適切な形で美しく弧を描く。また頭部は〔頭頂部から〕後頭部の中央のつむじまで弧を描き、そこから眉毛の水平線上の後頭部まで、弧を描いて下がる。

次に後頭部は〔額の旋毛から $1/8$ の頭部の〕 $1/7$ だけ弧を描いて下がり、さらに $1/8$ だけ口の線まで下がる。

次に適切に傾斜しながら、頭部は頸部まで美しい形で反りを描いて下がる。

額の髪際から前へと線を引き、弧を美しく描かせながら、眉毛〔の水平線〕まで線を下げる。額の線は〔 $a d$ 間の〕 $1/3$ に達しないうちに、線 $a d$ を超える。〔線 $a d$ は初出なので不明であるが、恐らく額の旋毛の位置と、側面の方形の外郭の垂線と眉毛上の水平線の交点を結ぶ線を指すと考えられる〕さらに人が認めるように、額の線は $1/3$ ほど線 $a d$ を超えて、眉毛上の水平線に当たる〔テキストでは a であるが、これは明らかに $a d$ のことである〕。

そして額の線を、上の瞼上の水平線に接する最初の線まで引き戻す。

その線を再び線 $a d$ の方に引いて、しかも額より前に出ないようにする。

その後鼻に連なるまで、その線を自然な美しい形で引き下げる。鼻翼は眼の隅に接する垂線を超えないようにする。また鼻翼の高さは鼻の長さの $1/5$ を超えないようにする。

鼻孔は線 $c b$ を少し超える〔線 $c b$ は初出で不明であるが、恐らく眼球の前に接する垂線と顎先の間を指す線と考えられる〕。

鼻孔は線 $c b$ を超えるが、上の鼻翼は弓形になり、鼻孔の $1/2$ の長さで、線 $c b$ に接する。上唇は鼻孔の $1/3$ である。

下唇は鼻孔の $1/2$ の長さである。その下は丸くくぼんで、顎へと突き出る。

顎の線は弧状に飛び出て、また b の方に弓形状に戻る。

顎下は b から頸部まで後退し、非常に好ましい線を描きながら終わる。

口は線 $c b$ 間に完全に含まれ、その後ろは眼球に接する垂線に幾分かかかる。口の赤みがかった部分を愛らしく尖らせる。

眉毛をしかるべき線上に描く。それは眼のすぐ上になり、その線と眉毛の下の最初の水平線との中間までおりる。眉毛は瞼の厚さの示される眼の隅の前から始まり、頸部に接する垂線と上瞼に接する水平線との交点で終わる。

眼の前部は鼻翼に接する垂線に接し、後部は頸

部に接する垂線といま述べた垂線との中間に達する〔意識〕。

眼球は〔額の〕旋毛、口、顎に接する垂線にも接する。

鼻の1/2の長さをなす6部分のうち、中央の2部分をとる。それは眼の開口部の大きさである。その上下の2部分はそれぞれ眼の厚さに当てられる。鼻の1/2の長さの上下の2部分には何も当てられない。眼の両方の隅は、眼の中央を通る水平線上来る。どこであれ線を正しく引くように留意することである。そうでなければ、すぐにも駄目になろう。深さと高さで過度になるからである。このようにすれば正しく描かれることになる〔ルッブリッヒの註によれば、欠字アリ〕。

私は全ての部分をこのように詳細に規定しようとは思わない。学ぶ者が自分で努力してより良いものを求めるようにするためである。

耳は眉毛上の水平線と鼻翼上の水平線の間にある。

耳朵の前は、頭頂部の0点に接する垂線に接する。

耳朵の後ろも垂線に接する。耳朵の幅は、 $1/8 \times 1/7$ である。

耳朵の幅は耳の1/2である。

耳の線をきれいに描き入れなさい。

耳から頬の下の頸部まで線を引く。

次に顔の正面を描く。顔の側面〔の方形〕を区切る水平線は、正面〔の方形〕も区切る。〔正面の方形の〕水平線と交差させて垂線を引き、その後それに顔の正面の形態を描き込まなければならない。

最初に〔身長〕の1/11の幅の頭部〔の方形〕を11本の垂線で12等分する。その垂線を a b c d e f g h i k l と記し、中央の線から引き始める。それを a として、以下表示してゆく。

この線 a 上に、額の旋毛、鼻、口、顎がくる。

鼻の下部は幅が広くなり、二線 l b に含まれる。鼻翼の幅はそれぞれ鼻の幅の1/2である。鼻翼の上下の幅は、鼻の下の幅の1/2である。

右の眉毛は鼻から始まり、その線上で上に上がり、また線 h まで下がる。

左の眉毛も同じ形で線 e まで描かれる。

右眼は i l 間に含まれる。左眼は右眼と同じ水平線と垂線との交差部分で b d 間に含まれる。

口は口の水平線上で二本の垂線 l b 間にある。

顎は〔l b間を〕少し超える。

耳は耳の水平線上で〔身長〕の1/11の1/12の幅がある。耳朵はその1/2の幅で下に描かれる。

額の水平線上で、その〔身長〕の1/14の幅は中央で二分される。頭部の線は中央部から外郭線まで、さらに耳まで弧を描きながら引かれる。〔この項やや不明〕

頬の線は耳から頸部まで弧を描きながら引かれる。

頸部は耳から〔身長〕の1/17だけ下に位置する。

額の髪は額の水平線の少し上と横に生じ、それを相応しい仕方で耳まで下ろす。

その後〔ウーバートラークによって顔の側面図と正面図から〕対角線が引かれて〔顔の平面のための方形の線が引かれ〕た後に、顔の平面図をその方形に描き入れる。最初に顔について記したときのようにである。

Nr. 2 断片的記述のため省略。

Nr. 3 女性の頭部の側面・正面・背面図の構成 (ロンドン草稿, 1515年, R. 2. 304~307頁)

1

足について記述したので、次に女性の頭部について以前より詳細に記述し、図解しよう。以下のようにする。

前述の男性の頭部のために三つの方形を並置したように、最初の方角に頭部の側面図、第二の方角に正面図、第三の方角に背面図を描く。前記同様に、女性の頭部を作る。〔欠字アリ〕

頭部のこれらの三方形は全て〔身長〕の1/8の高さである。また頭部の最初の方角の幅は1/8で、他の二方形の幅は1/11である。

最初に頭部の側面図のための方形を垂線で区切って、顔の奥行きを示そう。全ての垂線に文字を記す。

先ず二つの垂辺のうち、前を a、後ろを b とする。

最初に次のように区切る。

垂辺 a から後方に、これから示すだけの、平行な垂線を引く。

先ず a の 1/80 後方に最初の垂線 c を引く。この線は額の髪際の旋毛に接する。眉毛の前の端はその垂線までのびるが、鼻の上まではかからない。上唇の前もその垂線に接する。

次に a の 1/64 後方に第二の垂線 d を引く。この線は瞼、下唇、顎の前に接する。

次に a の 1/56 後方に第三の垂線 e を引く。この線は瞼の上のくぼみ、眼球の前、鼻翼の後ろ、口の隅、下唇の下のくぼみに接する。

次に a の 1/40 後方に第四の垂線 f を引く。この線は眼の後ろの隅と顎の下の切れ込みに接する。

次に a の 1/32 後方に第五の垂線 g を引く。この線は眉毛の後ろに接する。

次に a の 1/22 後方に第六の垂線 h を引く。この線は頸部の前に接する。

さらに a の 1/14 後方に第七の垂線 j を引く。耳はこの線の後ろになる。

次に a の 1/11 後方に第八垂線の k を引く。そこに耳の後端がくる。耳朶は k と j の中間にとどまる。

次に第九の垂線 l を引く。この線は後ろの首筋に接する。そこから頸部は後方に引かれる。

次に最後の垂線 m を引く。この線は後頭部のつむじに接する。

顔の諸部分の奥行きとその他必要な事柄を示す平行な垂線が引かれたので、次に顔の諸部分の高さを示す平行な水平線を引く。

先ず上を a、下を b とする。

次に頭頂部から 2/17 下に平行な水平線 c を引く。その線は顎下に接する。

次に第二線 d を頭頂部から 1/16 下に引く。この線は眉毛の前と後ろの両端に接する。眉毛は中央でその線の上になる。この線はまた耳の上にも接する。

水平線 a d 間を水平線 e で二等分する。この線

は額の旋毛の中央を通る。

水平線 a e 間の下 1/4 に水平線 f を引く。この線は垂線 m 上で後頭部のつむじを通る。

次に水平線 d c 間を水平線 g で二等分する。この線は鼻下と後頭部の首筋に接する。垂線 l 上のこの首筋で頭部と頸部が出会う。

次に水平線 d g 間を二点で三等分する。

d g 間の上 1/3 の処に水平線 h を引く。水平線 d h 間に眼の全体が含まれる。眼の両隅は d h 間の中央にある。眼球も同じく中央にあり、その高さは d h 間の 1/2 である。眼球の上下の両瞼は d h 間の残る 2/4 をしめる。

次に水平線 d g 間を三点で四等分する。d g 間の下の 1/4 の処に水平線 j を引く。この線は鼻翼の上と耳の下に接する。

次に g c 間を水平線 k で二等分する。この線は顎に接する。

次に水平線 g k 間を水平線 l で二等分する。この線は口の中央を通る。g l 間を三等分する。下の 1/3 が上唇になる。上の 2/3 は鼻と上唇の間の溝の長さになる。

次に水平線 l k 間を二等分する。上は下唇、下は下唇と顎の間のくぼみになる。

2

鼻と上唇の間に……

水平線 l k 間を二等分する。上は下唇になる。下は下唇と顎の間のくぼみになる。

平行な水平線を引いた後、額の旋毛から、垂線 a と水平線 b の交点に斜線を引く。この斜線の上に額の形態、その下に鼻の形態の線が引かれる。

顔の側面図を、垂線と水平線と斜線の引かれた最初の方形に描く。男性の頭部ですでに示されたように、比例がとれしかも男性の顔よりも繊細で細やかな特徴を帯びさせて、それらしく描くことである。

顔の〔正面の〕幅は眼の横の二つの垂線 a と b に接する。額の露出部はその両側で水平線 f まで上がる。

次に頭部の正面の第二の方形を、平行な垂線で

区切る。さらに頭部の側面図のための最初の方形の水平線を、第二の方形に転移して、第二の方形を区切る。

次のようにする。

頭部の正面の方形の〔右の〕垂辺を a とする。左の垂辺を b とする。垂辺 a b 間を九本の平行な垂線で10等分し、それらの線に文字を記す。a の横から始めて、c d e f g h j k l とし、l は b の横になる。

垂線 g は、額の旋毛、鼻、口、顎の中央を通る。

垂線 f h は両方の目頭と鼻翼の両端と口の両隅に接し、また顎の前〔の幅〕をきめる。二垂線 e と j は両方の眼球と瞳の中央を通る。垂線 d と k は両方の眦に接する。眉毛の両端はそれぞれ、二垂線 c d 間の中央と k l 間の中央にある。耳朶を含めて両方の耳で垂辺 a と b を包む。耳の上部は二垂辺 a と b の外にでる。頭部の幅が1/10であれば、頭部は水平線 e 上で垂辺 a と b をはみでる。

4. 様々な体型への頭部の適用

Nr. 1 七頭身の男性と女性の頭部の側面と正面図。九頭身と十頭身の人体像の頭部の拡大。

(ロンドン草稿, 1513年後まもなく, R. 2. 307~308頁)

身長の高さの1/8の男女の二つの頭部についてはすでに記述されたので、もしそうしようと思うならば、それらの頭部を1/7の高さにして、前に記した人体像と同様に、その比例配分を設定し直すことができる。そうすれば誤ることはないであろう。それを次のようにする。

まず顔の側面と正面の高さと幅はそのままにしておく。次に頭部側面の方形を上と後方に拡大する。前の方形は〔身長の高さの〕1/8の高さと幅であったが、今度はそれを1/7にする。頭部の形態の線を、額の旋毛から後上方に、〔拡大された〕方形の最上部の水平線まで引く。そこから頭部の線を、前の方形の上の隅まで、円弧状に後方に引く。その隅に後頭部の中心のつむじをおく。そこから頭部の線を拡大された方形の最後尾の垂線まで引く。その後、前の方形の外郭の垂線を通して、垂線 h b 間の前の1/4の水平線 m まで、頭部の線を円弧状に完全

に引き入れる。それで頸部は前より少し厚くなる。この側面図のための方形では、その他の部分は前のままである。

次に顔の正面の方形を以下のように作る。まず正面の方形を転移によって拡大された側面の方形と同じ高さにする。その幅は1/10であったが、それを今度は両側に拡大して、その幅を1/9にする。それに新しい頭部の円弧を描き入れる。それは拡大された方形の最上部の水平線と、額の両側に拡大された二垂辺に接し、水平線 l 上で二垂辺 a と b と交差する。耳も拡大された両方の垂辺に接する。耳朶は二垂辺 a と b の内側にとどまる。額の露出部も二垂辺 a と b にまで拡大する。同様に頬の線も、眼の横と下の二垂辺 a と b から、引き始める。こうして頬も少し大きくなる。他の部分は全て前のままである。

男性の顔を高さ幅とも拡大したように、女性の頭部も拡大する。後ほど男性の頭部の下に、女性の頭部を図示した。その図で顔の側面を二重の線で描いてみせたように、女性の頭部を高くした後、顎が方形の下辺にのしかかるようにしながら、口と顎を区切り直す。ただ正面図では、分かり易くするために、単一の線で示した。

前記の九および十頭身の像の頭部も拡大することができる。

C. 3.b. 男性の手

Nr. 1 断片的記述のため省略。

Nr. 2 男性の左手の平面図と側面図の構成（測定）。(ロンドン草稿, 1511/13年頃, R. 2. 310~311頁)

手の長さは1/10である。その長さを16の部分に分ける。2/16は中指の指先の節の長さである。その指先の関節を線で区切り、その水平線から下の手を水平線で二等分する。中指の最下の関節はその水平線上にある。人差し指の最下の関節も同じ線上にあり、人差し指の長さは、中指よりその1/7だけ短い。人差し指を二等分する。その線上にその指の最初の関節がある。その関節から指先まで七等分する。指先の節にその3部分、下の節

に4部分があてられる。

親指の長さは手の全長の $1/3$ であり、[その指先は手の全長の]半ばにある。親指の長さを区切ると、前が3、後ろが4部分である。

手の四番目の薬指は中指より、その $1/19$ だけ短く、その最下部は、手の関節の中央から中指の高さを半径として引かれた円弧上にある。薬指の長さは、11部分に分けられる。その5部分は最下部の節、6部分は指の上の節である。上の節は7部分に分けられ、その3部分は指先の節、4部分はその下の節である。

小指を次のように描く。小指[の根]は手の最外部の円弧上にある。小指の長さは、中指の手の根から手首までのそれと同じである。小指の長さを11部分に分ける。その5部分は小指の最下部の節、6部分は指の上の節である。上の節は9部分に分けられ、その4部分は指先の節、5部分はその下の節である。その後、各指の爪を描く。爪の長さは指先の節の $1/2$ である。手の幅は親指の処で、中指の長さと同じである。

親指の幅の大きさはその長さの $1/3$ である。

各指の幅は、最も太い処でその長さの $1/5$ である。

手の側面の厚さは、親指の上の処で、手の長さの $1/4$ である。指の厚さと幅は、丸いので、同じである。

手の関節の側面の厚さは、 $1/38$ である。手のその他の部分も、実際のきれいな手から測ることができる。

Nr. 3 男性の手の構成の平面図と側面図の構成。 (ロンドン草稿, 1511/13年頃, R. 2. 311~313頁)

特に手について前よりも实际的に〔詳しく〕記そう。前述したように、手の長さは〔身長〕 $1/10$ である。水平線で $1/10$ の $1/8$ の長さだけ〔手の先端から〕水平線で区切る。その線は中指の指先の関節を通る。

この線と手首との中央に水平線を引く。その線は中指と人差し指の最下部の関節を通る。それらは同じ水平の位置にあるからである。人差し指の長さは、中指よりその $1/7$ だけ短い。



図2 ロンドン草稿 5230, fol. 174^a.

中指の中央を線で区切る。指先の二つの節とその下の節は、同じ長さである。

人差し指の中央を線で区切れれば、指先の二つの節はその下の節と同じ長さである。指先の二つの節を7等分する。指先の節はその3部分であり、その下の節は残りの4部分である。

薬指は小指の前の最後の指である。薬指の長さは、中指よりその $1/9$ だけ短い。それを正しく手に位置づけるために、次のようにする。手首の中央から垂線を引いて、中指と人差し指の最下部の関節を通る水平線と交差させる。手首の中央にコンパスの一方の脚をおき、そこを基点にして、指の最下部を通る水平線と垂線の交点に他方の脚をおき、小指の方に円弧を描く。その円弧上に薬指の最下部の関節を定める。

薬指の長さは、中指よりその $1/18$ だけ短い。薬指の長さを11等分する。その5部分は下の節であ

り、6部分が上の指先の二つの節である。上の6部分を〔さらに7等分して〕、4部分が下の節、3部分が指先の節である。

小指を次のように描く。小指の最下部の関節を、上記の円弧上の手の端に定める。小指の長さは、中指の下の二つの節の長さと同じである。小指の長さを11等分する。その5部分は下の節であり、残りの6部分が指先の二つの節である。

上の6部分をさらに9等分する。その4部分は指先の節であり、残りの5部分はその下の節である。

指の爪の長さは、各々その爪のある節の1/2である。

親指の長さは手全体の1/3であり、親指は手の中央にあって、親指の上下にある手の長さは親指と同じである。

親指の長さを7等分する。その4部分は下の節、3部分は指先の節である。

手の幅の大きさは、親指の最下部の関節の処で、中指の長さと同じである。

手の関節の幅は1/32である。

中指の最厚部分は、中指の長さの1/5の厚さである。

人差し指の幅はその関節では厚さと同じである。

人差し指の指先は、中指のそれより少し細い。

薬指の幅は、その長さの1/5である。

小指の幅も、その最厚部分ではそうである。

次図にみるように、形態の線を〔以上の測定 of 印のある図形に〕描き入れる。〔その素描は遺されていないと思われる—ルップリッヒの註による〕

手の側面の厚さは、手の長さの1/4である。

手の関節の厚さは、1/38である。

手の他の細部は、実際の生きたモデルから写し取ることができる。

Nr. 4 八頭身の男性 a b の左手〔g h〕の構成。

(1 ニュルンベルク市立図書館、2と3と5 ロンドン草稿、4 ドレスデンのスケッチ帖から、全て1513年かその直後、R. 2. 313~319頁)

1

… 中指と人差し指の、二つの最下部の関節の中心を通過して線を引けば、二つの関節は同じ高さに並ぶ。〔以下については図3を参照のこと〕

次に点14から〔上記の水平線と〕平行な水平線を引く。

この水平線 d は、手に根付く親指の最下部の関節の中心を通る。

次に点6から〔上記の水平線と〕平行な水平線を引く。この線は中指の第二関節の中心を通る。

次に a b 間に垂線を引く。この垂線と水平線 a との交点を g とする。この垂線と水平線 b との交点を h とする。またこの垂線 g h と水平線 c との交点を j とする。垂線 g h は手の中央と中指を通る。

次に a e 間を6点で7等分して、上の3部分を水平線で区切る。この水平線 k は中指の指先の関節を通る。

中指を区切った後、人差し指についてもそのようにする。

中指の指先の節の点2から平行線 l を水平線 a k 間に引けば、人差し指の長さは l c 間に含まれる。その指を次のように区切る。

水平線 l c 間を水平線 m で二等分する。この水平線 m は人差し指の第二関節の中央を通る。

l m 間を7等分する。上の3部分は指先の節、下の4部分は第二の節である。

第三の節は m c 間に含まれる。

人差し指の節を区切ったので、親指を次のように描く。

点7から平行線 n を引く。この水平線は親指の前に接する。

親指の長さを7等分する。上の3部分が指先の節、下の4部分が下の節である。

次に残る二つの指を手位置づける。

コンパスをとり、一方の脚を点 h におき、そこを基点として、他方の脚を点 j において、円弧を描く。点 j は中指の最下部の関節の中心である。この円弧上に薬指と小指を位置づける。両指とも

中指と人差し指より低い位置にある。

点1から水平線oを引く。この水平線oは、薬指の上に接する。薬指の長さを7等分する。下の3部分は最下部の節である。上の4部分を9等分する。そのなかの上の4部分が指先の節、下の5部分が第二の節である。

2

次に前述の強健な男性の開いた手を、前より実際的に〔詳しく記そう〕。〔本報告第24巻のNr.22の男性が意味されている〕

手の関節〔手首〕から中指の指先までの手の長さは、男性の身長a bの1/10であると、君は教えられた。この1/10の線分を垂線としてたて、上に水平線a、下に水平線bを、それらが上下でこの垂線に接するように、引く。中指が水平線a、手の関節が水平線bに接するように、手をaとbの間に描く。この1/10の長さを18の点で19等分して、各点に数字を付し、上から123と18まで記す。

点11から〔a bに〕平行な水平線を引く。この水平線cは、中指と人差し指の最下部の二つの関節の中央を通る。それらの関節は手の同じ高さに並ぶ。

次に点14から平行な水平線を引く。この水平線は、手に根付く親指の最下部の関節の中心を通る。

次に点6から平行な水平線eを引く。この水平線は中指の第二関節の中心を通る。

次に水平線a b間に垂線をたて、垂線が水平線aと接する点をg、水平線bと接する点をhとする。この垂線g hと水平線cとの交点をjとする。

垂線g hは手と中指の中央を通る。

次に水平線a e間を6点で7等分して、点3から水平線kを引く。水平線kは中指の指先の関節を通る。このようにして、中指の節のあるべき長さは記された。

次に人差し指を区切る。

水平線a k間に、中指の指先の関節の点2から平行線lを引くと、人差し指の長さは水平線l c間に含まれる。人差し指の節の長さを、次のように区切る。水平線l c間を水平線mで二等分する。

この水平線mは人差し指の第二関節の中央を通る。

次に水平線l m間を区切り、7等分する。上の3部分は人差し指の指先の節、下の4部分は第二の節である。第三の節は水平線m c間にある。このようにして、人差し指の長さも区切られた。

親指を次のように描く。手の高さを示す最初の点7から平行な水平線nを引く。この水平線は親指の前に接する。親指の長さを7等分する。上の3部分は親指の指先の節、下の4部分は親指の第二の節である。

残る二つの指を描かなければならず、特別な仕方です手に位置づけなければならない。

次のようにする。コンパスをとり、一方の脚を中指の最下部の関節の中央にある点jにおき、他方の脚を点hにおく。点hを基点として、コンパスで円弧を描く。〔テキストではhとjが入れ替わっているが、これは明らかに誤記であるので、訳のようにした〕薬指と小指をこの円弧上に描かなければならない。両方の指は中指と人差し指より低い位置にある。

薬指を次のように描く。

〔身長の〕1/10の手の長さの最初の区切りの点1から、〔水平線aに〕平行な水平線oを引く。この水平線は薬指の上に接する。薬指の長さを7等分する。下の3部分は最下部の節の長さである。上の4部分を9等分する。その4部分が指先の節の長さで、下の5部分が中央の節である。

次に小指を手の最外部に描く。小指は中指の下の二つの節より長いわけではない。

小指の長さを11等分する。下の5部分に小指の最下部の節が含まれる。上の6部分を7等分する。その上の3部分に指先の節が含まれる。下の4部分が第二の節である。

爪の長さは、そのある指の節の1/2である。

以上で手の節の長さが分かったので、次に指の幅を測る。

手の関節〔手首〕での手の幅は、1/28である。

手の下の腕の節での幅は1/29。

更に腕の下の幅は1/30。

親指の最下部の関節を通る、水平線d上の手の幅は、中指の長さと同じである。垂線g hは手の

幅の中央を通る。

円弧の下端での手の幅は、人差し指の長さと同じである。

中指の下の幅はその長さの1/15で、指先の幅は指の下部の幅より、その1/4だけ細い。人差し指の下部の幅は、中指のそれと同じである。人差し指の指先の幅は、中指の指先の幅より細い。

薬指は下部の幅がその長さの1/5で、指先の幅が下部のそれより1/4だけ細い。

小指は下部の幅がやはりその長さの1/5で、指先の幅が下部のそれより1/4だけ細い。

親指は下部の幅がその長さの1/3である。

以上で手の全ての大きさが記されたので、次図にみるように、手の形態を表す線を方形に描き入れる。

中指は手の長さの1/2の処で手に根づく。小指と薬指との溝の方が、[中指と薬指との溝]より深い。手を側面からみれば、くぼんでいることに留意しなさい。それで手は厚みがあるように見える。親指と小指は手の内側による。親指の関節のある、手の最も厚い部分は、手の長さの1/3の太さである。

3

男性の開いた手について、前より明確に記そう。

手の関節〔手首〕から中指の指先までの手の長さは、〔身長〕の1/10であることを、前に述べた。この1/10の長さを垂線としてたて、その上端と下端をgとhとして、この上下の両端に水平線aとbを通す。

手はこの間の上下で、水平線aと、手首のhで水平線bに接する。この垂線ghは、手と中指の中央を通る。中指は、〔指から〕下に広がる手の〔甲のそれ〕より長い。

上記の1/10の長さを18の点で19等分して、各点に数字を付す。上から下に123とする。

点11から〔水平線aとbに〕平行な水平線cを引く。この水平線は中指と人差し指の最下部の二つの関節の中央を通る。両方の指は同じ高さに並ぶ。

垂線ghと水平線cの交点をjとする。

最後に〔薬指と小指の〕二本の指は、特別の仕方

でつけられる。

コンパスをとり、一方の脚を点hに、他方の脚を点jにおく。点jは中指の最下部の関節の中央にある。点hを基点として、点jからコンパスを移動して、円弧を描く。この円弧上に薬指と小指の最下部の関節を定める。両方の指は人差し指と中指より低い位置にある。

親指の長さを次のように測る。点14から〔水平線aに〕平行な水平線dを引く。この水平線は手に根づく親指の最下部の関節の中央を通る。

次に点7から平行な水平線nを垂線ghの方に引く。この線は親指の上に接する。親指の長さを7等分する。上の3部分が指先の節である。下の4部分が親指の下部の節である。

次に点6から水平線eを引く。この水平線は中指の第二の関節を通る。

次に水平線ae間を6点で7等分して、上の3部分を水平線kで区切る。この水平線は中指の指先の関節を通る。

次に人差し指の長さをとりあげる。

中指の指先の節の2部分を、平行な水平線lで区切る。この水平線は人差し指の上に接する。その分だけ人差し指は、中指より短い。

水平線lc間の中央に水平線mを引く。この水平線は、人差し指の第二関節の中央を通る。

次にlm間を7等分する。上の3部分が指先の節であり、下の4部分が人差し指の第二の節である。

次に最初の点1から水平線oを引く。この水平線は薬指の上に接する。薬指のこの長さを6点で7等分し、下の3部分が最下部の節である。上の4部分をさらに9等分して、上の4部分が指先の節、下の5部分が中央の節である。

薬指の長さを区切った後、最後に小指を描くが、その長さを中指の下の2つの節の長さと同じにする。

小指の長さを11等分する。下の5部分が最下部の節である。

上の6部分をさらに9等分する。上の4部分が指先の節、下の5部分が中央の節である。

指の爪は各々、そのある節の1/2の長さである。

中指は手の長さの1/2の処で手に根づく。薬指と小指との溝は、手を使い易くするために、〔中指と薬指との溝〕より深い。

手の指の節の長さを記したので、次にその厚さと幅を測る。

掌がくぼんでいるので、手の側面が厚みのあるようにみえることに、留意しなさい。親指と小指は手の内側による。

手の側面の厚さは、水平線d上で、掌の1/2の幅と同じ大きさにみえる。手の関節での厚さも同じである。

手首の厚さは、人差し指の指先の二つの節の長さと同じである。手の下の腕の厚さは、中指の最下部の節の長さと同じである。さらに下がると、腕はより厚くなる。

親指の指先の関節の厚さは、小指の指先の節の長さと同じである。親指の指先の厚さは、〔その根本のそれより〕1/4だけ細い。親指の側面の厚さは、正面の幅より大きい。

手の正面の幅について次に示すが、手の側面の記述において、君はさらに教えられるであろう。

〔この項やや不明〕

手の正面の幅を最初に測る。

手の関節での幅は、手の長さの7/18である。その下の腕の幅も同じである。

手の幅の最大の位置は、親指の第二の関節上で、小指の下の水平線d上であり、その幅は中指の長さと同じである。

人差し指の最下部の関節から小指のそれまでの、円弧状の両端間の、手の幅は人差し指の長さと同じである。

中指の最下部の幅は、その長さの1/5である。中指の指先の幅は、その最下部より、その1/5だけ細い。

人差し指の最下部の幅は、中指のそれと同じである。ただその指先の幅は、中指のそれより幾分か細い。

最後の二本の指、薬指と小指は、各々幅が長さの1/5である。指先の幅は各々最下部よりその1/4

だけ細い。

親指の幅は、小指の指先の長さと同じである。

同じ形態の指は一つもないことに留意しなさい。各自自分の手で確認すれば、分かることである。

以上手の各々の節の厚さと幅を示したので、手の形態の線を入念に描きなさい。手の形を真っ直ぐにしてはならない。次図に示したように、小指の下で手は横に張り出す。

4

〔以下の記述は本報告第24巻のNr.22の図1に記されたものである。〕

薬指の前。

人差し指の最初の関節。

小指。

最初の関節。

薬指の第二関節。〔二度記される〕

それを9部分に分ける。

それとともに。

この線上で手の幅は、人差し指の長さと同じである。

この線上で手の幅は、中指の長さと同じである。

中指の指先。

人差し指の指先。

中指の最初の関節。

人差し指の最初の関節。

中指の第二関節。

人差し指の第二関節。

この線は親指の指先に接する。

親指の最初の関節。

中指と人差し指の最下部の関節。

親指の最下部の関節。

手の関節。

5

〔以下の記述は図3に記されたものである。〕

薬指の最初の関節。

小指の前。

小指の最初の関節。

薬指の第二関節。

- 小指の第二関節。
- 薬指の最下部の関節。
- 小指の最下部の関節。
- この線上で手の幅は、人差し指の長さと同じである。
- この線上で手の幅は、中指の長さと同じである。
- 中指の前。
- 薬指の前。
- 人差し指の前。
- 中指の最初の関節。
- 人差し指の最初の関節。
- 中指の第二関節。
- 人差し指の第二関節。
- 親指の指先の前。
- 親指の中央の関節。
- 中指と人差し指の最下部の関節。
- 親指の最下部の関節。
- ここが手の関節である。

Nr. 5 とNr. 6 は断片的記述のため省略。

C. 3.c 男性の足

Nr. 1 男性の右足の平面図。足の指の位置についての注意。(1523年の人体均衡論のための下書き。ロンドン草稿, 1513年頃, R. 2. 322~326頁)

1

手が描かれたので、次に足について以前より明確に記述し、図示しよう。単純とみられているこのようなものにも、理論 (kunst) が潜んでいる。

仕事で物事を探究すればするほど、それだけ優れた見事な結果を得ることになる。だが足の輪郭線を究め、それを記述するだけでも、我々には難しい。それがたいしたものともみられていない場合でも、そうなのである。まして形像全体について、異なる形にした方がよいのか、いまのままが真実を写しているのかについては、言うことができない。足全体を形よく定め、各部分を区別し、それぞれを佳い形に仕上げ、それらを正しい位置におくことが、如何に難しいことであるかに、留意す

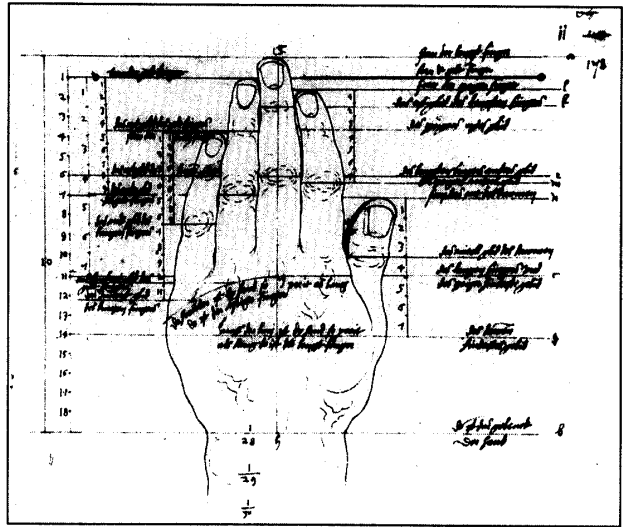


図3 ロンドン草稿 5230, fol. 173r.

ることである。

2

手が描かれたので、次に足について以前より明確に記述しよう。足は描くのに難しいので、それを正確に図示しよう。たいしたものともみられていないこのようなものにも、偉大な理論 (kunst) は潜んでいる。部分が探究されればされるほど、それだけ多くのことが見いだされることが、後ほど示される。足の輪郭線について適切に記述して図示することだけでも、我々の知性が究めることができるかどうかを、私としては知りたいものだ。そのためにも足全体の形態をよく観察して、それが如何によく作られているか、次に部分を探究して如何にそれらを区別して描くべきかを、知らなければならない。

3

手が描かれたので、さらに足について以前より明確に記述し、図示しよう。足は描くのに難しい。たいしたものともみられていないこのようなものにも、偉大な理論 (kunst) は潜んでいる。部分が探究されればされるほど、それだけ多くのことが見いだされることが、後ほど示される。人間の知性が、足の輪郭線だけでも究めて、それを美しい人体像の一部となせるかどうかを、私としては知り

たいものだ。まずは足全体の形態を観察して、どうすればよき形態が得られるのか、各部分の大きさと相違の求め方、指と指との関係、各々の指を特有の形態と大きさで作る方法、指相互の突出の仕方の違い、等について知らなければならない。さらに踵と踝の位置の違いにも、留意しなければならない。さらにこの理論 (kunst) を大事に思う人であれば、もっと色々と思いつくこともある。私もここで〔諸君が〕理論に一層の関心をよせるようにするため、若干ではあるが教示する。測定の仕方を知れば、多くのものを作ることができ、しかも簡単な仕方で人の関心を惹くことができる。この足に付す点につける文字に留意しなさい。これらの文字は足の前に記されなければならない。「足の前に」ということで、私は足指の方に向かってということの意味する。〔ここに入る一文の意味不明〕以下始める。

足の長さは〔身長〕の $1/12 + 1/13$ で、足の前の幅は $1/17$ である。〔以下については図5を参照のこと〕この長さから、長方形を作る。それを水平におく。長い上辺を a、下辺を b とする。2本の短い垂線のうち、前の足指の方を c、後ろの踵の方を d とする。この方形に足を描く。足は〔親指〕の長い指で方形の前の方の垂線 c に接し、踵で後ろの方の垂線 d に接する。足は親指の下部の膨らみと踵の横〔の張り〕で、方形に接する。足の踝も水平線 a に接する。足は小指の下部の膨らみでも水平線 b に接する。

まずこの方形に足の平面図を描く。最初に方形を区切ることにして、長方形を2本の平行な垂線で区切る。足指に近い方の垂線を e、後ろの方の垂線を f として、垂線 c d 間を3等分する。その最前部に親指が作られる。中央部には足の甲全体を包む露出部が作られる。最後部に踵が作られる。そこから脚が上に伸びる。

最後部の垂線 d を、2本の水平線 a b 間で、6点 g h j k l m で7等分して、点 g から平行な水平線を垂線 c まで引く。この水平線 g と垂線 c との交点を p とし、水平線 g p と垂線 f との交点を n とする。次に点 m から平行線を引き、その線と

垂線 f との交点を o とする。この点 o は、足の線が踵まで引かれる前に、踝の下の足裏の外郭に接する。

点 h から〔水平線 a に〕平行な水平線を $1/17$ の長さで引く。この水平線は垂線 f をこえる。この線の末端から足の甲は始まる。この水平線 h と垂線 f との交点を、アンドレアスの十字印 f とする。

次に2本の垂線 f d 間を2本の平行な垂線 z f で3等分する。〔上記の点 f と同じ記号 f が垂線にも用いられていることに注意しなければならない〕

点 z から垂線を引く。この垂線上で、脛骨の内側の踝は、上の水平線 a に接する。同様に踵も垂線 f 上で、上の水平線 a に接する。脛骨の外側の踝上部の脚はほぼ、垂線 z 上の、水平線 a から $1/26$ 下に収まる。直立した脚の下は、垂線 z 上の、踝の下方で外に張り出す。足の幅は、垂線 z 上の、水平線 a から踝の端まで、 $1/23$ である。

水平線 l m 間を3点で4等分して、水平線 l に最も近い点から垂線 z まで〔水平線 a に〕平行な水平線を引く。その交点を a l とする。この交点は、後ろの踵にまわりこむ前の、足裏の外郭に接する。

次に水平線 k l 間を2点で3等分する。水平線 l のすぐ上の点から平行な水平線を引く。その水平線と垂線 f との交点を b l とする。踵はこの交点から点 h までまわりこむことになる。

垂線 f d 間を6点で7等分する。後部の3部分を垂線 w で区切る。この垂線は脚の後ろに接する。次に〔垂線 w の〕すぐ後ろの点から垂線を引く。この垂線は、踵の線が線 d e までまわりこむ前に、踵の上に接する。

次に水平線 a b 間で、垂線 c を点 q で2等分する。q b 間を2点 r s で3等分する。q r 間を2点 1 と 2 で3等分する。垂線 c e 間で、水平線 b を2点 t v で3等分する。

次に斜線を引く。最初に点 p と e、次に点 q と y を結ぶ。〔y は初出であるが、図5からみて垂線 e f 間を3等分する2点のうち f より上の点を指す〕この2本の斜線間に親指が描かれる。親指は下部の膨らみの処で少し斜線をこえる。斜線 q y と垂線 e の交点を o とする。〔テキストでは数字の9に似た記号が使われているが、

ここではこれを θ に代えた]

多くの粗野な農民の足がそうであるように、親指が真っ直ぐに伸びているわけではないことを、知ることである。〔他の〕4本の長い指を描くために、別の斜線を引く。しっかりとすわるために、それらの指は小指の方による。斜線 ry を引く。

直線、斜線、曲線の全てがすでに引かれたので、それらの線から、足の形態をどのように描いたらよいか分かる。踵については前に示された。前述したように、踵の後部は丸くなるように引かれなければならない、そのように引かれたとして、その後足の線を足裏の外郭の交点 b_1 から a_1 、さらに点 o まで引く。

点 o から足裏の線を、〔垂線〕 x と水平線 b の交点まで引く。〔 x は初出であるが、図5からみて垂線 ef 間を3等分する2点のうち e よりの点を指す〕足の小指の下部の膨らみは、その交点に接する。この足の外郭を示す形態の線は蛇行するように引かれなければならない。足裏全体の外郭線についてそうである。

次に小指の下部の膨らみを、垂線 e まで引く。そこから小指の線を上に引きあげ、水平線 b と斜線 tc_1 間の上 $1/2$ まで引く。〔点 c_1 は初出で、この項の意味は聊か不明〕

次に他の全ての足指の形態を、引かれた斜線と載線との間の各々の一定の位置に、節、関節、爪の長さや大きさを考慮しながら描く。次に親指の下部の膨らみの線を、水平線 a と垂線 e の交点から、垂線 xy 間と水平線 $a \cdot pq$ 間の交差部の中央の、足の甲まで引く。足の線をそこからさらに、水平線 a と垂線 f の両方に向かって、垂線 fn 間の上の $1/5$ の処まで斜め上方に引く。そして足裏の線を点線として、水平線 a 上の、垂線 zf 間の中央から、垂線 f 上の fn 間の下 $1/3$ まで引き、さらにそこから垂線 y 上の、水平線 pg のほんの近くまで引き、さらに垂線 x を通って、親指の下部の膨らみまで引く。

次に垂線 f がその中央を通るように、足の外側の踵の顕著な張り出しを描く。またその長さが2本の垂線 e と x の前後にかなり広がるように、小指の膨らみをはっきりと描く。

次に脚の形態が足の甲上で平面図としてみえるように、脚の後ろの線を円弧状に描く。その際、前述したように、内側の踵が水平線 a に接し、脚の後ろの付け根が垂線 d_1 に接する。〔 d_1 は初出で、この頃の意味はやや不明〕足の甲は垂線 f の前にでる。脚の両踵間の幅については、前述された。ただ内側の踵は平らに、外側の踵は尖るように描き、また内側の踵は前の方に、外側の踵は後ろの方におくことである。脚の内側の付け根のくぼみを、外側のそれより長くして平らにする。このようにして君は、脚が足の後部〔足の甲より後ろの部分〕の完全な中央上にあるのではないことに、気づく。というのも足の後部は少し張り出して、外側の踵を支えなければならないからである。だが締めりのない足にならないように、過度に張り出させてはならない。君の気に入るように、足の後部の中央に脚をおいてもよい。足の平面図では、脚の後部の付け根のくぼみの線も描き入れる。また脚の平面図の下に、外側の踵の張り出しを描き込む。

こうして足の平面図が描かれた。それでこの平面図の上に新たな長方形を作って、それに足の立面図を描くことにする。

踵と足裏の幅を示す足の外郭線を、垂線 x と水平線 b の交点から点 k に引かれた斜線より、張り出させて引くこともできる。踵の張り出しは、点 k の処で少し細まる。

4

足指を立派に作ろうと思えば、それを真っ直ぐにして描いてはならない。それで次のようにする。親指は真っ直ぐにするが、その隣の三本の指は足から少し斜めに生えださせる。親指を他の指より長くする。図にみるように、親指と小指を他の三本の指に較べて、足の内よりにおく。

5

〔次の記述は図5の紙葉に記されたものである〕

これはよい足である。

これは右足である。

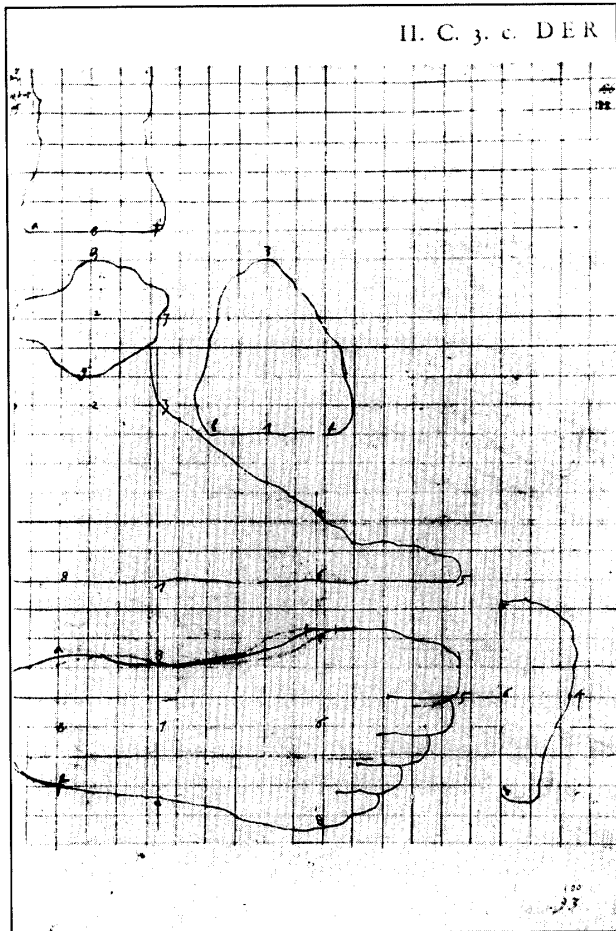


図4 ロンドン草稿 5228, fol. 188^a.

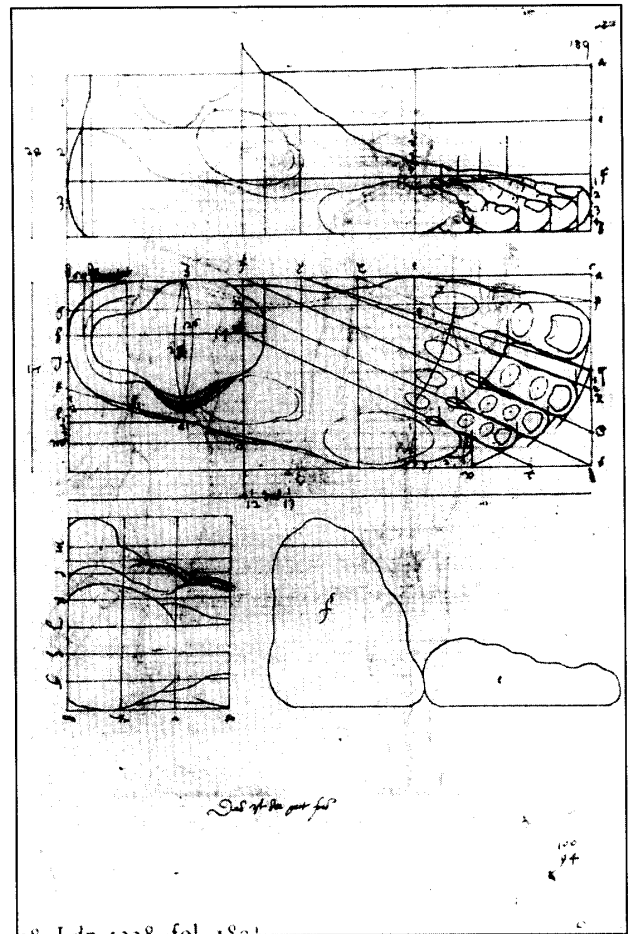


図5 ロンドン草稿 5228, fol. 189^a.

挿 図 一 覧

- 図1 ロンドン草稿 5231, fol. 6f^a.
- 図2 ロンドン草稿 5230, fol. 174^a.
- 図3 ロンドン草稿 5230, fol. 173^a.
- 図4 ロンドン草稿 5228, fol. 188^a.
- 図5 ロンドン草稿 5228, fol. 189^a.

挿図説明の「ロンドン草稿」は、大英博物館所蔵のデューラー草稿を指す。なお本稿は本学の平成7年度研究特定図書（*Die graphischen Künste*）による研究成果の一部である。